



# C.M.D - case III -

---

---

---

qedqed

---

## 登場人物

---

### 登場人物

うみっち

本名：海水 さより（うみみず さより）

性別：女性

趣味：推理小説を読む、リアル脱出ゲーム参加等のミステリー全般

出身：兵庫県（現在も両親と姉と実家暮らし）

在籍：北摂国立大学法学部法学科1回生

近況：立て続けに事件を解決（case I、II 参照）

ひめ（ひめ姉）

本名：海水 ひめじ（うみみず ひめじ）

性別：女性

趣味：残高照会、人間観察

特技：人の顔と名前を覚えること

出身：兵庫県

学歴：京阪府立大学院経営学研究科卒業

さよりの関係：7歳上の姉

近況：大阪に魚介レストラン「ヒメジ」を開店（UMEビルディング12階）し、オーナーとして多忙な日々

「さより、あんたまた事件解決したんだって？どんな事件だったの？」

今日はめずらしく家でくつろいでいるひめ姉と近況を語り合っている時に、事件のことを聞いてきた。

私うみちは大学の入学式で事件に遭遇して、その事件を解決したのを皮切りに、その後友達が巻き込まれた事件を2件解決した。

そういえば、前の事件に関しては詳しく話してなかったなあ。

ひめ姉自身がオーナーを務めるお店の开店準備が忙しくて、会う機会すら少なかったっけ。

リクエストに応じて、私は事件の大筋を話した。

「・・・といった感じでね。正直、やばい事件だったけど、とにかくそらっちが無事で良かったよ。」

「・・・・・・・・。」

相槌を打ちながら事件の話聞いていたひめ姉が急に黙り込んだ。

「どうかしたの？」

「あんたの推理力で解決してほしい事件があるんだけど、力を貸してもらえないかな？ちょっと引っ掛かっていることもあって。」

「えっ？」

ひめ姉が遭遇したのはひめ姉のお店が入っているビルで起きた殺人事件だった。

ひめ姉自身もお店自体も全く関係ないことだが、未解決のままなのでマスコミに要らぬ腹を探られてストレスになっているのだという。

そんな状況なので、ひめ姉自身も真相に辿り着こうとしているらしく、事件関係者に話を聞いたり、何故か警察内部の情報も得たりしていた。

私自身が遭遇したわけでも、事件関係者に会ったわけでもないのに、安楽椅子探偵みたいに話を聞いただけで解決できるとは思わないが、とりあえず話だけでも聞くことにした。

事件の概要はこうだ。

事件が発生したのは先月の4週目の日曜日15時頃。

場所はUMEビルディング5階のTHKN株式会社大阪支部。北欧家具を扱っていて結構大きい会社らしい。

被害者は

東松 英子（ひがしまつ えいこ）27歳

THKN株式会社総務部勤務

身長170cmと長身でとても美人。尚且つ仕事もできて社内でも人気だったそう。

急ぎの仕事を片付けるため休日出勤をしている最中に後ろから頭部を鈍器で殴られ死亡した。

凶器となったのは、会社入り口にあった招き猫。割れた状態で死体の周りに散らばっていた。そして、被害者はもうひとりいた。

西林 愛子（にしばやし あいこ）24歳

THKN株式会社秘書課勤務

こちら身長172cmと長身で童顔のかわいらしい、誰にでもやさしい女性だったようだ。

彼女は東松の死亡推定時刻より少し後、同じビルの屋上から落ちて亡くなった。

当初はスマホに遺書が残されており、東松を殺した後に自殺を図ったと見なされたが、自殺を偽装した節があり、それにより他殺と判断された。

同じ場所でほぼ同時刻に同じ社内の人間がふたりも殺されていることから、同一人物による犯行と警察は断定した。

ちなみに出入りは自由だったので、誰にでも犯行は可能とのこと。

警察はまずある男を疑った。

北表 丈二（きたおもて じょうじ）28歳

THKN株式会社営業課勤務

身長167cmと小柄（本人は全く気にしていない）だが、プライドはかなり高いらしい。

なかなかのイケメンでプレイボーイというのが一致した人物像だ。

その彼を巡って三角関係にあった、らしいのだ。

”らしい”というのは、本人のスマホを調べてもそれらしいものは見つからず、社員や被害者の家族、友人に聞き込みをしてもを裏付ける証言が皆無だから。

ただし、皆無というのには語弊がある。

実際、北表が東松と西林それぞれとふたりっきりで会っていたという証言をした者が複数人いた。

だが、三角関係だったと証言しているのは北表本人ただひとりなのである。

しかも、自分はその気は全くなかったが、ふたりがしつこく誘うので、何度か社外で会っただけとのこと。

だから、北表自身は「三角関係ではなく、不等号関係ですよ。」と警察に話していた。

現に北表は事件後、とある令嬢と婚約した。その令嬢も高身長との噂。

しかも、北表には完璧なアリバイがあった。

複数人の証言、場所や時間を考慮すると犯行はまず不可能。何らかのトリックを仕掛けた形跡もなし。

そこで再度聞き込みをした結果、浮かび上がったのがこの男。

南裏 亮（みなみうら りょう）19歳

THKN株式会社アルバイト

身長156cmと男性としてはかなり小柄だが、中性的な雰囲気と相成って女性人気は絶大らしい。

ただし、女性と遊んでいるという情報はなく、そもそも興味がない様子。

実は東松と西林は、北表ではなく彼を好いていたそうなのだ。

周りの人間も同様の証言をしており、これこそ三角関係ではないかと、警察は色めき立った。

東松と西林のスマホにも彼を誘った記述が残されていた。

ただし、南裏本人は彼女たちの好意にすら気付いていなかったし、ふたりっきりで会ったこともないと証言した。

そもそも彼女らの好意もどれぐらいのものだったかも不透明。周りの人間の証言も恋愛感情というよりは、かわいい弟みたいな感じで接していたようだ。

しかし、南裏には当日のアリバイはなかったことから、動機は薄いながらも警察は最重要人物としてマークしていた。

その矢先、南裏が真夜中に自宅で自殺した。

「ふたりを殺した」とパソコンに遺書を残して。

これで事件解決、とはいかなかった。

他殺を自殺に見せかけるのは、想像以上に難しいのだ。警察を見くびってはいけない。

そこで警察は当初の容疑者だった北表のアリバイを念のため確認することにした。

彼は自宅に居たが、ひとりだったので証明することはできない、とのことだった。

まあ、時間的に仕方ないことだけだ。

そして、ひめ姉が引っ掛かっているのは次の証言である。

北表は事情聴取時に、南裏のことは名前と顔は知っているぐらいで話したこともない間柄だったと証言した。しかしである。

「私、北表さんが運転している車の助手席に南裏さんが乗っているのを見たことがあったのよ。」

「えっ？それほんと？」

「うん。私の特技知ってるでしょ？」

ひめ姉は人間観察が趣味で、顔と名前を覚えることに非常に秀でている。

そのひめ姉が言うのだから間違いない。

「だったら、かなり親しい間柄だった可能性もあるよね？」

「うん、確かにちょっと引っ掛かるね。」

ここで小休止して、お茶を淹れ、ひと息つくことにした。

「整理すると、容疑者はふたりだけど、東松さんと西林さん殺害時は北表さんにアリバイがあり、南裏さんにはアリバイがない。でも、南裏さんはその後殺害され、その時は北表さんのアリバイはなし。そして、残った容疑者の北表さんは南裏さんとの関係を隠している可能性が高い。う～ん、決め手がないなあ。これだけではちょっと分からないよ。」

「やっぱり？難しいよね。それにしても、結局容疑者とされた人物は明暗分かれたよね。北表さんは令嬢と婚約。それに引き換え、南裏さんはその数日後に殺されるなんて。」

「そんな短期間のことなんだ。」

「うん。そういえば、東松さんと西林さんが殺害される前日だったかな。北表さんがね、路地裏で誰かと抱き合ってたのを目撃したのよ。その時は北表さんのこと知らなかったから大胆なカップルだなんていうぐらいにしか思ってなかったんだけどね。北表さんが相手に覆いかぶさるように抱きしめてたなあ。相手の顔は見えなかったんだけど、時期的に婚約者だろうね。幸せいっぱいよね。」

「・・・・・・・・。」

「どうしたの？」

「話を戻すけど、北表さんが覆いかぶさるように抱きしめてたって表現は目撃した通りの表現？」

「うん。目撃した通りだよ。」

「・・・・・・・・。」

「もしかして、分かったの？」

「あくまで推測に過ぎないけどね。恐らくこれは三角関係でも不等号関係でもない。見事なまでの一方的な矢印関係だよ。」

「見事なまでの一方的な矢印関係？」

「うん。この事件は憶測や不確かな証言が多過ぎると思うの。例えば、北表さんの証言。」

「どんなところ？」

「東松さんと西林さんが自分に好意を持っていた、という点。確かにふたりっきりで会っていたようだけど、付き合っているとは限らない。現に本人以外に付き合っていると証言した人はいない。そればかりか、北表さんはふたりが一方的に自分に好意を持っていたと言っていたけど、逆も有り得ると思うの。」

「逆？」

「うん。北表さんはふたりに告白して振られた可能性があるってこと。ふたりっきりで会っていたのは告白した時だったんじゃないかな。そして、南裏さんにふたりが好意を持っていた、というのも誇張し過ぎだと思う。実際、かわいい弟って感じで接していたらしいし、南裏さん自身も恋愛関係を否定しているしね。」

私は一気にまくしたてる。

「で、ここからが核心ね。ひめ姉の目撃談はとても大事だと思うの。」

「あー、北表さんと南裏さんが同じ車に乗っていたってやつね。」

「ううん、違う。それももちろん大事だけど、路地裏での抱擁の方。」

「えっ？そっち？あれってそんなに大事なことなの？」

「ひめ姉の言葉が見たままだとしたら、おかしい点があるの。」

ひめ姉は首をかしげている。

「北表さんが覆いかぶさるように相手を抱きしめてたんだよね？」

「うん。間違いないよ。」

「だったら、やっぱりおかしい。北表さんの身長は167cm。東松さんも西林さんも婚約者の女性も北表さんより長身なんでしょ？北表さんが相手に覆いかぶさることは無理だよ。」

「あっ！」

ひめ姉はハッとして、声を上げた。

「身長の高い第4の女性ということも考えられるけど、令嬢との婚約前の出来事だから考えにくい。何より北表さんて長身の女性が好きそうだから、自分より身長の高い女性を選ぶとは考えにくい。」

「だったら、あれは誰だったの？」

「それはひめ姉のもうひとつの目撃談に真相が隠されていると思うの。」

ひめ姉は目を閉じ、考えを巡らせる。

「もしかして……。」

「恐らく抱擁の相手は身長156cmの南裏さん。北表さんが南裏さんとの関係を隠しているのが何よりの証拠だと思う。確かに違和感はあるよ。でも、南裏さんて中性的で女性に興味がなさげだ

ったのよね？」

「北表さんと南裏さんは同性だけど、恋人同士だったってことなんだあ。」

私は首を横に振る。

「違う。だって、北表さんは女性と婚約したんでしょ。」

「あっ、そっか。じゃあ、結局どういうこと？」

「私は北表さんが南裏さんの恋愛感情を利用したんじゃないかと推理したの。」

「えっ！じゃあ、犯人は……。」

「アリバイの観点からすると東松さんと西林さんを殺害したのは南裏さんで、南裏さんを殺害したのは北表さんだと思う。北表さんが婚約した後に南裏さんが殺害されたことから考えて、婚約したことによって南裏さんといざこざがあったんじゃないかな。」

「なるほどね。確かに南裏さんからしたら、愛する人のために殺人まで犯したのに別の人と婚約するなんて許せないよね。」

「もしかしたら、北表さんは最初から口封じのために南裏さんを殺す計画だった可能性もあるけどね。」

「その可能性はあるわね。いろいろ用意周到だしね。これが真相か……あっ、やっと分かった！」

そう言うと、ひめ姉は近くにあったメモ用紙にペンを走らせた。

東松さん ← 北表さん

↑        ↓

南裏さん        西林さん

「確かに↑（矢印）の形になる。しかも、全てが一方向を向いた矢印。これがさよりが言った”見事なまでの一方的な矢印関係”ってことね！」

「うん。そういうこと。」

「でも、北表さんが東松さんと西林さんに殺意を持つきっかけはそもそも何だったのかな？それがなければ、事件は起きなかったわけでしょう？北表さんはふたりに振られたわけだけど、令嬢と婚約したわけだし、殺す動機はないように思うけど。」

「これも推測によるけど、動機は”男のプライド”じゃないかな？北表さんてプライドが高かったそうだから、振られたことが許せなかったんだと思う。」

「なるほどね。しかも、立て続けだしね。」

「うん。以上が私の推理！」

「ありがとう！警察の人に話してみるよ。」

何故警察の方と仲が良いかはややこしくなりそうだから黙認した。

「あー、スッキリした！これで仕事に専念できるよ！！」



ひめ姉は飛び切りの笑顔を浮かべ、自身の城へと出発した。

さて、ひめ姉の悩み事も解決したみたいだし、そろそろ明日の準備に取り掛かろうかな。  
明日は友達とミステリーナイトに参加する予定。久し振りに会う友達もいるし、楽しみだなあ。

まさか、そこで本当の殺人事件に遭遇するとは思ってしなかったけど。